

これまでの成果と課題

野尻 取組を通じたこれまでの成果と課題についてお聞かせください。はじめに、モデル校として精力的に取り組んでいただいている舟形中学校の矢部先生からお願ひします。

矢部 職員だけではなく舟友会（生徒会）も昨年度の後半から魅力ある学校づくりに向けて、一緒に取り組んでいます。今年度からは生徒会のスローガンにも「魅力ある学校づくり」という言葉を加え、執行部や委員会もどのようなことができるかを考えながら行っています。例えば、舟友会では「ともに認め合う」絆づくりの取組や学力向上週間においてグループでの学び合いにチャレンジしています。家庭学習において分からなかったことを持ち寄って解決を図る取組です。昨年度からは「魅力創造サミット」を開催し、小中連携にも取り組んでいます。また、「のりしろ」づくりにも取り組む、中一ギャップの解消を目指しています。例えば、小学校時に取り組んだ「ワンチーム大作戦」を中学校一年時の一学期間に、十分ではありませんでしたが取り組みました。

野尻 絆づくりの取組や「のりしろ」づくりの先進的な取組を紹介していただき、ありがとうございます。続いて、大山校長先生に、校長として取組を俯瞰してみた感想や舟形中学校で大事にしている授業づくりと関連させてお話をいただいでよろしいでしょうか。

大山 今年の春から赴任しました。驚いたのは生徒会長の入学式の新生生に向けた歓迎の挨拶の中で「私たちは魅力ある学校づくりをしています。そのために四人グループになって、みんなで学び合いをしています」という言葉を聞いたことです。子どもたちが主体となって取り組んでいること、そして認め合って支え合って学び合いをしようとすることを自分の言葉で語っていることを聞いて、子どもたちへの浸透度が高いことを感じました。ただ今年度は、新型コロナウイルスの影響があり、「ワンチーム大作戦」をはじめ、集団関係づくりをすることがあまりできなかったのが残念でした。授業づくりにおいても、授業を核として人間関係を作ろうとする中で、新型コロナの影響もあり、グループでの学び合いを行うことは一年生にとっては難しいところがありました。人間関係づくりについては、人と比べて自分がいいという考えではなく、「自分史上最高の一日、自分の中でベストな一日を送ろう」という意識が大事と考えます。人と比べることで苦しくなっている生徒もいるので、人間関係サポートプログラムを取り入れながら、ケアしていきたいと思

生徒と共につくる「魅力ある学校づくり」の推進
質の高い授業づくりを通して不登校の未然防止を目指す

出 席 者	席 者
堀 清一郎 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター センター長	野 尻 学 最上教育事務所 指導主事
小 野 憲 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター 総括研究官	野 尻 学 最上教育事務所 指導主事
渡 辺 正 舟形町教育委員会 学校教育指導主幹	野 尻 学 最上教育事務所 指導主事
大山 由起子 舟形町立舟形中学校 校長	野 尻 学 最上教育事務所 指導主事
矢 部 暁 舟形町立舟形中学校 教諭	野 尻 学 最上教育事務所 指導主事

☆日時：令和2年11月25日（水）
☆会場：舟形町立舟形中学校

ます。

野尻 先生方だけでなく、生徒たちにも魅力事業の目的や良さが浸透していることが素晴らしいことだと感じました。それでは続いて教育委員会の立場で学校の取組を支えていただいた渡辺学校教育指導主幹から、お感じになっていることをお聞かせください。

渡辺 舟形町の子ども達は保小中と12年間同じ人間関係が続きます。小野先生の考えをもとに野尻指導主事と連携して、中学校を核として魅力ある学校づくりを小中同じスタンスで推進しています。「魅力ある学校づくりとは何なのか、どれだけ質の高い学びの場を提供できるか」を考えると、「魅力ある学校づくりは魅力ある授業づくりから」ということを確認しています。先生方は、質の高い授業をつくるのが勝負と考え、小中の先生方同士の授業研究会の交流を行うなど、授業を見合いながら連携を深めていることが大きな力になっていると思います。小中共に同じスタンスで、授業づくりがメインだという意識が高まってきています。一年生よりも二年生の方がさらに人間関係の距離が近くなるなど、成長している様子が学年を追って見えていることが成果として表れていると思います。

野尻 保小中の12年間で子どもを育てていくこと、そして授業づくりにおいては小中9年間同じスタンスで取り組んでいくということが大変素晴らしいことだと感じました。それでは、小野先生から3人のお話を聞いてお聞きしたいことはありませんか。

小野 舟友会としての取組がはじめからこれほどまでに子どもたち主体ではなかったと思われのですが、子どもたち主体の取組となったきっかけは何でしょうか。



矢部 当然スタートは職員主体でした。魅力ある学校づくりのワーキンググループに参加して、日新中学校さんが生徒主体の取組をしていることを学び「これはいいな」と思い、生徒と一緒に取り組むことを提案したところ、生徒たちが「やります」となったことがきっかけです。

渡辺 やはりワーキンググループでの協議が様々な取組に生きているということだと思います。

大山 生徒指導関係の会議が以前と比べて減ってきています。町で一つの中学校では情報交換する場がなかなかないので、情報交換を通して他校の良い取組について互いに取り入れていくことができる機会は大変ありがたいです。

堀 生徒が魅力ある学校づくりに受け身ではなく、主体的に取り組んでいることが大変素晴らしいと思います。生徒を巻き込みながら居場所づくりが行われているところが注目すべきところだと思います。

野尻 ワーキンググループでは、舟形中学校の取組も他校にとって大きな刺激となっています。情報交換をしながら、より質の高い取組が展開されていると感じています。関連して他にありませんか。

矢部 舟形中学校では「授業の主体は生徒」という考えで、昨年度から校内授業研究会の事後研究会で授業の感想を生徒に語ってもらい、私たちの授業改善に生かしています。

大山 どの生徒も非常によく語るので感心しています。「何でそこでそう思ったか」「あの時はどんなふうに思ったか」などについて、具体的に自分の言葉で率直に語っています。

渡辺 生徒の側から見た今日の授業を語ることは、授業づくりの上で大事だと思います。

小野 生徒はどのように選ばれるのでしょうか。

矢部 選出は学年部会に一任しています。同じ生徒が二度当てることはありません。

渡辺 たくさん授業研究会を重ねているので、ほとんどの生徒が選出されていると思います。

野尻 特定の生徒だけが選出されるわけではない、というのがポイントでしょうか。

小野 そうですね。そのような場面での生徒もしっかりと自分を表現できること自体が、取組の成果と考えます。生徒の声を受け止める先生方の勇気とそれに応える生徒たち。そこまで生徒を育て上げた先生方に感心します。

大山 生徒を大人扱っていることを大事にしています。生徒に敬意を払っていることが伝わっているのではないのでしょうか。

渡辺 やはりこれまで話題になったように「生徒と共に」という観点がポイントとなっていると思います。

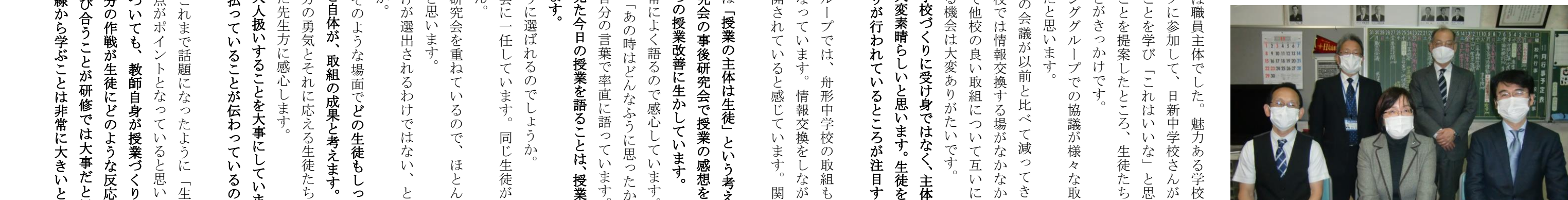
大山 授業についても、教師自身が授業づくりを面白がることや自分の作戦が生徒にどのような反応として表れたかを学び合うことが研修では大事だと思います。生徒の目線から学ぶことは非常に大きいと感じます。



堀 清一郎 センター長
国立教育政策研究所
生徒指導・進路指導研究センター



小野 憲 総括研究官
国立教育政策研究所
生徒指導・進路指導研究センター



前列左から 小野総括研究官、大山校長、堀センター長
後列左から 渡辺学校教育指導主幹、矢部教諭